

事變下に於ける談話とその取扱

聖美幼稚園 内山憲堂

一 生きてゐる談話

聖戦下第二年目の新年を迎へた。南京、廣東、漢口、續いて陥落し誠によろこばしい限りである。けれども、蔣介石は抗戦を持続してゐる、更に經濟戦を思想戦に特に新支那建設に、戦はこれからである。

この重大時局下にあつて、吾々保育者はその幼児教育の上如何なる方法を講じなければならぬか、保育項目を如何に國策に副はしめるか云ふことを考へなければならぬ。

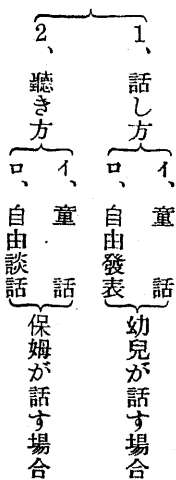
與へられた題目が「事變下に於ける談話」であるから談話を中心にして検討を進めて見ることにする。

本論に入る前に「談話」そのものについて、今日迄一般保育の持つてゐた考へを是正して置きたい。

談話を童話であるか考へてゐる人があるがこれは古い考へ方であつて、談話即童話ではない。次に談話と童話とは全く別個のものであるか考へるのは新しすぎて脱線した考へ方であつて、談話と童話とは決して別個のものではない。

い。

談話を便宜上分類して見るならば



自由發表とは、童話以外、幼児が、見たこと聞いたことを自由な形式で發表することである。自由談話とは保姆と幼児とが自由に問答をして語り合ふ場合を言ふのである。

このすべてのものを包含したものを談話と云ふ。

そして談話は常に今日の幼児の世界に動きかけ、幼児のその日その日の生活に觸れてゐなければならぬ。

月に一回又は週に一回時間を決めていやいやながらお義理的に形式的に話す童話そのものに生命があるだらうか。幼児と共にあり即發即應、常に幼児の心に反響して行く童話、日々の新しい事項を中心にした自由談話、幼児の

その日くくの自由發表から進展した談話—そこに生命の躍動がある。談話を幼児の生活の圈内に持つて、談話を生かせ—、そこに談話の新使命と真目的があるのである。

二 幼児は事變をどう見てゐるか

談話は幼児の生活である云つたが、然らば、幼児は彼等の生活を通じて今度の事變をどう考へてゐるか云ふことを知らなければ、談話を幼児に與へることが出来ない。

一、どこの國と戦争してゐるのですか。

私は常にこの問題に對しては關心を持ち、十三年の秋「事變を子供にどう話すか」と云ふ小冊子を出版したが、子供の考が事變發生當初から變つて行つてゐるかきうか。幼児が事變を如何に見てゐるか云ふことを十二年の十一月末の調査と十三年の十一月末の調査とを擧げて比較して、御參考に供したいと思ふ。

項	十 二 年 度				計 %	十 三 年 度				計 %
	赤組	白組	男	女		赤組	白組	男	女	
支那	六	二	一四	一三	三五七四・五	九	六	一一	一〇	三六六六・七
しらない		二	一	三	六一二・八	三	三	四	五	一五二七・八
滿洲	一	一	一	一	四八・五	一	一	一	三	三五・五
ロシヤ					一一・一					
ドイツ	一				一一・一					
計	八	五	一七	一七	四七一〇〇	一三	一〇	一六	一五	五四一〇〇

二、どうして戦争をしていますか。

項	幼		年		十		二		年		度	
	男	女	赤	白	赤	白	計	%	赤	白	計	%
支那が悪いから	一						一八	三八・三	一		一一	二〇・四
知らない	七						一七	三六・二	八		二二	四二・六
支那がせめてくるから							一〇	二一・八			一	五・五
支那が子供を殺すから							四	六・四			一	三・七
支那が仲よくしないから							二	二・二			一	七・四
支那が仲よくしないから							一	二・二			一	七・四
日本が偉くなつたから							一	二・二			一	七・四
どうしても											二	七・四
ドイツとイタリアと仲よくするまで											一	一・九
支那が打つてくるから											二	三・七
お國のためだから											一	一・九
其他											二	五・五
計	八	五	一七	一七	四七	一〇〇	一三	一〇	一六	一五	五四	一〇〇

三、どうして日本は強いのでせう

項	幼 児		十 二 年 度		十 三 年 度	
	男	女	赤 組	白 組	赤 組	白 組
知らない	五	三	三	五	八	五
一生懸命やるから			一	四		
力があるから			一	二	一	一
大和魂があるから			四	四	一	一
天皇陛下がいらつしやるから				一		二
澤山ゐるから			三	四	一	一
規律が正しいから	一		一	二		
日本だから	一		一	三		
忠義をつくすから			一	一		
支那が弱いから	一		一	二	一	
其他			三	五	三	三
計	八	五	一七	一七	一三	一〇
			四七	四七	一六	一五
			一〇〇	一〇〇	五四	一〇〇
			三・五	三・五	一・九	一・九
			一〇・六	一〇・六	一・九	一・九
			四・三	四・三	一・九	一・九
			二・一	二・一	一・九	一・九
			六・四	六・四	一・九	一・九
			八・五	八・五	一・九	一・九
			二・〇	二・〇	一・九	一・九
			八・五	八・五	一・九	一・九
			四・三	四・三	一・九	一・九
			一〇・六	一〇・六	一・九	一・九
			三・五	三・五	一・九	一・九
			八	八	一・九	一・九
			五	五	一・九	一・九
			一〇	一〇	一・九	一・九
			二八	二八	一・九	一・九
			五・一	五・一	一・九	一・九

四、もしもあなたのお父さんが戦争に行つたらどうしますか。

項	幼 児 年				十 二 年 度				十 三 年 度			
	男	女	男	女	計	%	赤組	白組	男	女	計	%
待つてゐる	一	二	六	四	一三	二七・七	一	一	一	二	五	九・三
解らない	三	二		四	九	一九・〇	五	五	二	二	一四	二五・九
行かないからいゝ	二		二	二	六	二二・八	二			一	三	五・五
手紙を出す			一	一	二	四・三			五	一	六	一一・〇
留守番をする							一				二	三・七
田舎へ行く	一		二	一	四	八・五						
行くところまで行く			六	一	七	一四・九						
幼稚園へ休まず来る												
母さんのお手傳ひをする		一		一	二	四・三		一		二	三	五・五
友達と遊ぶ			一		一	二・一	二	一		三	五	五・五
お宮へ行つて死なない様におがむ												
其他	一			二	三	六・四	二	一	八	四	一五	二七・八
計	八	五	一七	一七	四七	一〇〇	一三	一〇	一六	一五	五四	一〇〇

五、非常時には皆さんはどうしたらいいとせう。

項	幼 児 年				十 二 年 度				十 三 年 度			
	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%
解らない	五	四	五	六	二〇	四二・五	一〇	二六	四	六	二七	五〇・〇
お金を使はない												
お母さんの言ふことをまきく												
献金をする			四	二	一〇	二二・三			二	一	三	五・五
慰問袋を作つてあげる			一	一	二	四・三				一	一	一・九
貯金をする												
大きくなつて働く			一	一	二	四・三						
田舎へ行く	一				一	二・一					一	一・九
お利口にしてゐる								一			三	五・五
鐵砲で打つてやる	一				一	二・一					一	一・九
行儀よくする												
其他					五	一〇・六					三	五・五
計	八	五	一七	一七	四七	一〇〇	一三	一〇	一六	一五	五四	一〇〇

右の表について、その大體を見るならば、支那と戦争をしてゐる云ふことに對しては認識を持つて來てゐて、本年はさすが、ドイツやロシアと戦争をしてゐる云ふのはなくなつてゐる、滿洲と戦争してゐる云ふのは滿洲國へ兵隊が出るこゝろ、露滿國境問題から來た影響と見られる。

第二問に於て、「支那がせめてくるから」なきが減り、「支那が仲よくしないから」が増加して來てゐるのは時局に對しての認識が次第に正確になつて來てゐることを示すものではなからうか。

第三問に於て、「一生懸命にやるから」がなくなつて、「力があるから」が増加してゐるのも面白い現象である。

第四問では「行かないからいゝ」云ふのが減つて「手紙を出す」の増加してゐるこゝろ、「行くこゝろまで行く」云ふのがなくなつて「幼稚園へ休まず來る」が出て來たのも當を得た答となつて來てゐる。

第五問に「お金を使はない」云ふのが十三年度のみに三人出てゐるのは、消費節約、資源愛護が本年春頃から強調せられた影響と見るこゝも出来る。

一言斷つて置かなければならないことは、十二年度より、十三年度に於て「知らない」が多くなつてゐるのは赤組(年少組)が十三年に多くなつてゐるこゝによる。

三 時局の正しい認識

統計で見ても解る通り幼児は常に、環境の影響を受けて、自分の小さい認識を作つて行く、それは非常に刹那的ではあり、しかも無批評、無條件で盲信的である。故に幼児に徒らに殺伐な話や、單に敵愾心を唆るだけの末梢的な部分的な話によつて幼児の頭を刺戟することは、避けなければならぬ。

先づ第一に彼等に與へなければならぬことは、時局に對する正しい認識である。日本が何故に支那と戦つてゐるか、支那の間違つた大將、蔣介石が日本と仲よくしないためである。——支那のよい人たちは仲よくして日本の兄弟分として助けてやらなければならぬ云ふことを明らかに與へなければならぬ。幼児たちは第二の國民で今後四十年五十年後の日本を背負つて立つ者であるから、徒らに成人の小乗的感情のみによつて單なる麻酔的刺戟を與へないやう、四十年五十年後の日本の立場を考へ、高所、大局に立つて、子供をして東洋の盟主なり世界的な日本國民たる時世に處する大きな教育をしなければならぬ。

四 事變話材の取り扱ひ

事變に於ける皇軍の活躍は空に陸に水に實に目覺ましいものがある。毎日の新聞記事、ラヂオニュース、報告講演

に必ず一つや二つは子供に話してやる話の材料となるやうなものを見出すのである。

戦争程、人間を緊張させ、氣持ちを真剣にさせ、人間本來のあひのまゝの姿を見せ、更に人間以上の力を示すことではない。故に戦線に於ける美談、感激談は數限りなく生れて来る。これ等の話の中幼児に理解出来、興味を持ち得るものは適當に之を與へなければならぬ、これがやがては愛國心となり日本精神養成の一端ともなるものである。

但しこの際注意しなければならぬこと二三を擧げて見る。

1、殺伐な話は避けること

「敵の首を切り落した」云か「ブスリに芋ざしにした」云か云つた様な刺戟が強すぎる話は改作して與へなければならぬ。

2、感傷的な話はいけない

戦争は生命のやり取りであるから、反面から考へる感傷的になりやすいものである、センチメンタルな話は絶対に話してはいけない。

3、部分的武勇談に捉はれないこと

如何に戦争は言ひながら、特に立派な働きをする人は平素に於て、相當の覺悟を持つてゐる人である。故に單に戰場に於ける武勇談のみの描寫に止まらず、その立

派な働きをした人の平素の心掛け、ことに幼年時代の立派な行ひなきを附加して話して行くことによつて、人格に觸れて行くことにもなるし、話として有機的關係や變化を作る上にも必要なことである。

4、支那を馬鹿にした言葉を用ひないこと

「チャンころ」云か「チャンチャン坊主」云か云ふ侮蔑した言葉を用ひてはならない。幼児の「からかひ」は兒童心理學的に見ても一種の自己保存の本能と遊戲本能との現れとも見るこの出来る全く生理的のものである。よるこぶから云つて、かゝる言葉を用ひることは將來、日支親善の上に支障ともなるものである。

五 正確な知識

幼児は意識的無意識的に彼等の周圍から、言葉だけを知るものである。可成り難かしいことでも聞きかちつて来る。ツェッペリンが來ればツェッペリンを、戦争が始まればトーチカ、クリークを、コンドル機が來ればコンドルを………全く驚く程聞いて来る。しかしその眞意は知らない、或は自分勝手な解釋をしてゐる。

防空演習の時に、「空襲」云ふことを幼児たちは思ひ思ひに解釋してゐたことがあつた。

憲ちゃん

「僕(こゝ)、昨夜空襲したよ」

「空襲つて、みんなどこですか」

「空襲つて、電氣を消す(こゝ)から」

この子は電氣を消す(こゝ)を空襲(こゝ)考へてゐる。

大谷さん

最近暇をこつた傭人が青年學校の正服で防空演習の夜、通りかゝりに大谷さんの家へ一寸寄つたのを、

「僕(こゝ)にゐたケンさん(二元の使用人の名)昨夜空襲(こゝ)でやつて来たよ」

この子は防護團や青年學校のカーキ色の服を「空襲(こゝ)」云つてゐる。

小島さん

「僕、昨夜、乗合バスで歸つたら自動車も空襲してゐる(こゝ)よ」

この子は黒布で覆ふ(こゝ)を空襲(こゝ)解してゐる。

幼児の言葉に對して正しき解釋をして正確な知識を與へてやらなければならぬ。

それには、保姆諸姉が常に、時代に後れない様に、新しく正確な知識を持つてゐる(こゝ)云ふ(こゝ)が必要である。クリーク、カタバルト、トーチカ、タンク、租界、手榴彈(テリウダン)等新しい言葉は次から次へ(こゝ)出て来る、そして是等の言葉は皆幼児が關心を持つ言葉ばかりである。

六 特に望ましいこと

事局に當つて談話(こゝ)して特に與へていたゞきたい(こゝ)の二三を擧げて見る(こゝ)次の様なものである。

1、日本精神涵養の資(こゝ)なるもの

外來の物質文明萬能時代は過ぎた。これからは日本精神を強調して行かなければならない時である、我民族の持つてゐる精華を現はして行かなければならない時である。

忠君愛國

武士道的精神

責任感

部下を愛す(こゝ)

罪を憎んで人を憎まない(こゝ)

等に關する、いろいろな話。

2、物資愛護、消費節約に關するもの

幼児たちは「非常時だから、もつた(こゝ)ない(こゝ)云ふ(こゝ)をよく言ふが、家庭での誰かの言葉を聞いてゐるのである。幼稚園でも話してやればよく了解するのである。これに關した美談(こゝ)な(こゝ)面白く話してやる(こゝ)も結構な(こゝ)こゝである。

3、國民說話(民族童話)を與へる(こゝ)

日本十大噺、口碑傳説等を出来るだけ多く與へる様に

して貰ひたい。「桃太郎」は日本人の血を通してぎんなに日本精神を養つて来たことだらう、「かちかち山」にしても「猿蟹」にしても日本人の正義感を傳へて來てゐるものである。

近頃家庭でも幼稚園でも民族童話を與へることが少くなつた様である。童話に紙芝居に人形芝居に、大に與へたいものである。

注意することは小學校國語讀本の内容に準據すること、これと違つた話をして、それが先入主となつてゐる小學校へ行つて子供の頭を混亂させることになる。

4、年中行事を盛大にやること
年中行事も民族の中から生れた一つの祭りであつて、節分、雛まつり、花まつり、お節句、七夕まつり、菊まつり、お月見、餅つき、それぞれ面白い説話を伴つてゐるものであるから、行事を催すと共に、行事についての傳説なり、行事に因んだ話を聞かせてやること云ふことを忘れてはならない。

七 終りに

心ある保育者、眞に幼児のことを考へる保育者は、一時の流行や、目先のことや、大人中心のこゝみによつて幼児の前途を誤つてはならない。時勢に迎合して形式的な、見

得を街つた保育をしてはならない。

國家が、今日の幼児に何を求めてゐるか。今日の非常時を切り抜けて次に來るものは何か、長期建設の後を引き受ける第二國民として必要なる立派な身體と精神を彼等に、しつかりと植えつけて置かなければならない。

談話は、特にその精神を作り上げる上に於て重要な役目をするものである。今日迄の傾向は談話と觀察は保育項目中に於ても一番顧りみられなかつたものであつた、しかし日本精神を養ひ、民族意識を傳へる上に談話はなくてはならないものになつた。今後愈々談話の研究、發達を希望して止まない次第である。

しかして、談話によつて與へるものは、常に幼児の生活の圈内にあるものであり、幼児の心の糧となるものであり、特に、次の時代を背負つて立つ大國民として、東洋の盟主として、立派な日本人として血となり肉となる内容を持つものを選んで貰ひたい、かくして談話に生命を與へよ。談話を生かせ。そして保育を生かし、子供を生かせ。